

## 資 料

# ヴィヘルン『ドイツ国民への覚書』 (続・3)

北 村 次 一

この訪問行商<sup>\*</sup>の起源もフランス、イギリスに求められる。それはまだ新しい。だがその試みは行われており、成果はすでに豊かに祝福されたものであり、これからも、さらにそうなるであろう。この点に関し経験を集めたものがそれを証明する。例えば、ザクセン王国<sup>\*\*</sup>で、プロイセン州で、ノイフォルポムメルンで、ノイマルクで、ブレーメン<sup>\*\*\*</sup>、ハンブルクで、プロイセンのライン州で、フランクフルトa.M.の周辺地域で（先の革命の夏の共和制運動の時にピンカートン博士がおくった訪問行商によってこれまで以上に聖書が普及されるはずであった<sup>103)</sup>）、バーデンで、またおそらく他のところでも。

\*H<sup>1</sup>へのヴィヘルンの追記：「新訪問行商、その萌芽は宗教改革および印刷術と同じく古い。上記 pg.64〔本書S.221〕を看よ。

訪問行商、文献：（プロイセン聖書協会本部第34次年報において）ブーヴァルト聖書協会第15（シトレーレン）地区での聖書広告に関する——12重要条項での——シェーンブルン（シュレジエン）のマイドルン牧師による覚書を看よ。郷土伝道・福音協会第1次報告におけるこの件の切実な紹介および多くの事例（in Elberfeld 1849, Gütersloh bei Bertelsmann）pg.30 sqq. また pg.33の教示。

訪問行商：プロイセン聖書協会本部第34次年報におけるこの件の切迫した紹介を看よ。訪問行商に関して曰く。「われわれが尚も長らく手をこまねいておるとするならば、まさに恥知らずであろう」と。

「'Kolporteur' という名前はフランスに起源するもので宗教改革時代に、宗教改革者の書籍を同郷人の小屋にもたらし、その際また口頭で福音を証した、

かの敬虔な人々に与えられたものである。近代においてこの名前は、真先に再びフランスでひろがった。アメリカではこの名前はアメリカ・トラクト協会がその最初の訪問行商人を雇った1841年以来再び使用されるようになった。」——このようにローエ『北アメリカ教会報告』〔Löhe, Kirchliche Mitteilung über Amerika 1849, No.11〕は誌している。同誌によればいま北米に250人(?)の訪問行商人が活動しており、そのうち約30人はドイツ人住民の間で、ニュー・ヨーク州（およびニューヨーク）で5人、ペンシルヴァニア州4人、オハイオ4人、インディアナ5、イリノイス3、ミズーリ4、アイオワ1、ウィスコンシン2、オーバーカナダ2、ルイジアナ3（最後の2州では特にフランス人の間で）。これら訪問行商人のうち若干の少数の者は同時にまた説教師である。——

メクレンブルク・シュヴェリン聖書協会の指導幹部は、1852年5月20日に（最高宗務会議委員Kliefoth, 司教座教会説教者BöcklerおよびDehn博士が署名）訪問行商人を雇う資金——年150ターレルを要する——を出すことができず、そのため資金を全国土で集めることをそれだけ一層緊急に必要としているといういささか哀れな布告を出した。これを実現するために、協会は「様々な地域でこの目的に対し、より緊密な Vereinigung (Vereinenの代わりに)のために会合し、聖書のデポを設立することを説教者およびその他の教会賛助者に」要求した。<sup>104)</sup>

\*\*\*H<sup>1</sup>へのヴィヘルンの追記：オーバーラウジッツでヴェンド人のなかで1845年秋、ザクセン聖書協会本部によって訪問行商人が雇用されている。<sup>105)</sup>

\*\*\*H<sup>1</sup>へのヴィヘルンの追記：『ハンブルク・アルトナ聖書協会第34次年報』訪問行商に関する報告を看よ。<sup>106)</sup>

他の聖書協会、例えばブレスラウ協会は、最近の年次報告で、この実効性の原則は認められねばならぬと明確に表明している。<sup>107)</sup> これらドイツ訪問行商人は聖書だけか聖書とトラクトとを共にか普及させたが、同時に他の書物を扱うことはしなかった。聖書普及に関するこの活動の結果として、（すくなくとも多くの場所で）まだ甚だ多くの聖書の不足が判明した。そこで、例えば、誰もが家庭に聖書を1冊もてたらといつも人々が心にかけていたある大きなドイツ都市では、ひとりの訪問行商人によって、90日間に、大きくもない市区で300冊の聖書がやすやすと販売された。なお一層重要

な結果としては、行商人たちが、多くの場所でその高価な商品に対してだけでなく、訪問に対しても感謝をもって迎えられていることが強調されるべきである。そここでは拒否が、かしこでは啓示の言葉へのあざけりが、なかったわけではなく、別の場所では初め軽視と疑いを口に出した。しかし、いたるところでこれは説教のきっかけとはならないが喜ばしく確信に満ちたキリストの告白、しばしば信仰の真理についての対話、多くの場所ですばやい合意、神への謙虚、啓示の探究、失われていたようにみえる慰めの達成への機会となった。かつて若きときに信じ、聴いたが長らく忘れていた想起を再び続けるための機会に、あるいはすでに永眠した敬虔な両親の祝福として。

だが訪問行商人はドイツの多くの場所で、ドイツ人の協会によってでなく、まさにイギリス聖書協会によって設立された。全く最近のことだが例えばここ北部地方で多くの場所に。たしかにこの事実はわれわれのゲマインデの福音的榮譽になることではない！ 他方、だがそれはいかにこのことが見捨てられた民衆の心に再び届くための正しい方途のひとつであるか、イギリスのキリスト者の確信についての有利な証言である。というのはかの民衆は、この活動にかかっている祝福の十分な経験がある。加えて、その助力によってフランスにおいてだけでも、先年、108人のこの種訪問行商人でその活動が営まれたということは、イギリスにおいては数百人のこれら働き人が聖書とトラクトをもって従事していることである。彼らを信頼し、印刷された書物に書きとどめられた見えざるよきものを必要とするところに、つねに das Eine のみを見やりつつ。港湾、人里はなれた村々のある平地、年の市、大衆の集会、兵士、土工、鉄道工夫は、イギリスにおいては大都市・工場地帯に劣らずこの使者のことをよく知っている。それはキリスト的愛によって派遣され、国土を移動する使者の群れである。

同様な熱心さでニューヨーク協会はその業務を遂行している。この協会のために、先年、397人の訪問行商人があり、一部は年間を通じて、一部はその年の長期ないし短期間活動した。これらの人は総じて254,308軒の家庭を訪問し、集会で10,000回近く講演をした。協会はその維持のために1年で33,937ドルを気前よく出した。<sup>108)</sup>

この活動は教会的な成果を实らすものであるのか？—— 蒔かれた言葉が実際に神言であるとき、何か他のことが期待されるのであるか？ われわれはその地方における長老派教会の今の長老で、富裕な同郷人であり、尊敬を集めているひとりの市民のことを想起する。この人にインネレ・ミッシォンの例の使者が、先年、かの小さな文書

のひとつをさし出した。この書は火酒に反対することを述べ、その醸造酒の製造と喫飲に反対する聖書のモチーフを主張した。この人物、これまでそのことには何等心を煩わすことがなく、かの酒の製造から大きな利益を得ている田舎の隣人はどうかとただ世俗的なことだけを心配したこの人物が、自分の心の内を感動させた内容のその小冊子をさらに次の人に渡した。なお別の状況のもとで、読んだ神言の印象を新たにし、なお一層力強く影響を与えさせるということになった。——その結末は、たんに彼自身の蒸留酒製造所と隣人たちの所有するそれらのすべての火がとっくの昔に消されてしまったということだけでなく、その代わりに3つの教会が建てられ、日曜学校、キリスト教の目的を追求する協会が奉献されたということである。それはトラクトが影響を与えたのだというべきではなく、神言が影響を与えたのだ。神言、それを農家が捜し求めたのではなく、神言の方が彼らを捜し求め、それが彼らに届けられたのである——後者こそは、インネレ・ミッションが配慮すべきこと、教会がインネレ・ミッションを通して手に入れるべきもの、インネレ・ミッションの使者を通じて手に入れるべきものである。

異常ともいうべきその成果によって、往々この伝道方法が祝福されているということを、なお明白な1例<sup>109)</sup>を通し、具体的にすることを断念するわけにはいきません。その際、通常われわれの工場で支配的である精神、またドイツの浴場で最も力を得るのを常としている精神を考えてみると、イギリスの浴場で、連れの無い友が篤志的な訪問行商の試みに加わるという次の出来事はそれだけ一層関心を引き起こし熟慮のきっかけとなるものである。

それはランカスター伯領にある海水浴場ブラックプールでのことで、1845年9月、その浴場におった数名の友が聖書の配布によってこのゲマインデの福祉のために何かあとまで残ることをしようと心を合せた。数週間で友人たちは1,800冊の聖書を流布させた。このうちのひとりにはマンチェスター出身であった。そこへ帰った後、ブラックプールでの成果によって勇気づけられ、この活動を継続した。彼は、自らの努力で、この大工場都市で生徒数40,000人を数える日曜学校にまで到達した。教師と生徒はそれを通じて神言の伝播に対するきわめて生き生きとした努力で満された。その人たちは平日には工場に行き労働者・使用人にそのことで相手をした。いまや彼らもまた販売に参加した——商品倉庫・貯蔵庫の監督人、数多くの木綿紡績工場で雇われた別の

若い人たち、またきわめて様々な職種・年齢のその他の人たちが、同様に、仲間に加わった。ある日曜学校出身のひとりの少女は7週間に聖書700冊を販売した。ある日曜学校では4週間で2,800冊売られた。別の学校では8週の間、週毎に1,000冊の買い手があった。一度に聖書17,000冊がこの需要のためロンドンからマンチェスターに向けられねばならなかった。11月のはじめ29日間に20,515冊、またこの年の10月1日から12月18日までに、184,542,840冊の旧新約聖書と新約聖書がマンチェスターで売られた。それからこの運動はハル、ダービー、ブラッドフォード、リヴァプール、バーミンガム、ブリストル——マンチェスターとは鉄道によってきわめて容易にかつ早く交通している——へと移植された。とくに注目すべきこととして、聖職者だれひとり運動を提唱するものもなく、また運動を援助する手配もするものもなかったということが強調される——もちろん、これらの聖職者が神の国の促進のために努力しなかったというわけではない。その同じ時代に神を賛美することが出来、コミュニストたちの社会主義的集会を勇敢で生き生きとした福音の説教によって教会のあのしもべがその社会における共産主義を攻撃する手工業者社会および労働者のキリスト教的避難所<sup>アジール</sup>に変えたのは、その同じ人々であった。

親愛なる祖国の教会よ、かような労働者また汝の永遠の君のために戦って収めたかような勝利をどこに示さねばならぬか？

ただ、印刷機を用いた、または対話・訪問の方法を用いた言葉だけでは、何千という人々を再び目覚めさせ、休閒の広い教会地に対し完全な霊的経営を取り入れることが重要な、現存する要求に対して、十分ではない——直接の談話のなかでの、また絶え間ないケヤーのなかでの生き生きとした告知がさらにつけ加わらねばならぬ。

第1。福音は再び「色々なところで」説教されねばならない。大衆が他にはできないときには市場や街頭で自由に提供され賛美されねばならない。これは新しい、力強く、活気を与える仕方でおこされねばならないのであり、それによって全ての人々が説教を聴き、それによって、古くなり無価値となった何千人ものその人が再び新しい、貴重な生命財となり得ることができればということである。何千人もの人に連絡をつけることができないが、市場や街頭が自分の家となっているが故に、これ以外には近づく機会のない大衆に訴えるのに、その他何をなしうるだろうか。全く特別にこのことは大都市および、例えば鉄道工夫、いわば移動村民である労働者大衆に妥当する。

われわれの教会は巡回説教師——換言すれば旅行・街頭説教師の施設を所有するにいたらねばならぬ。訪問行商人と印刷された言葉は説教師に先行したり、後続したり、同行したりする。その結果、本来的な説教における伝道、また対話での、また文書での伝道が相互に協力して効果をもつ。これらの説教師は新しいゲマインデを形成するつもりでないことは、われわれが立てた原則自体から当然であり、事の性質上やむをえない。いや彼らの課題は、一定の秩序をもったゲマインデの現にある生ける中核に、麻痺した成員を新しい、新鮮・健全な働き手として連れ戻すということである。彼らはいわば一定の秩序をもったゲマインデの門の前に立ち、その中に入るように誘うことである。彼らはきわめて深い愛の衝動から墮落した大衆に魂のことを心にかけるように求め、キリストが祝福を与えつつ住みたもう信者のゲマインデへの飢え渴きを覚醒し、ゲマインデでの現にある満足感とそこに備えられた主の食卓を指し示し、かくて実際は、確固たるゲマインデの職務に役立つように手助けをしその働きを促進することになりたいものである。彼らの職務はゲマインデと教会が再び快復するのに応じて消滅することになる。

\*H<sup>1</sup>へのヴィヘルンの追記：インネレ・ミッシオンによるドイツでの言葉の本来的意味での Reisepredigt はバーデンでの旅行説教師ヴィルヘルミの配置によってはじめて実現された（1849年初め）。——1849年秋ブラントはインネレ・ミッシオンのために下ラインラントに旅行した。——ブレンネッケ牧師は11月にベルリンの地方に——旅行説教師はヘッセン・ダルムシュタット（同地の協会）、ノイマルク（リヒト牧師）で非常に望まれた。

ドベランでの6月会議<sup>110)</sup>。

この事柄は慣れない、全く新しいものである所以その価値について決定することが出来ない。ここで問題としているような非常に大きな悪を除去するには徹底的に断固とした処置をとる基準が必要である。この基準はその性質においてもその範囲においても危機の異常さに相応したんに形式的な原則にしたがって評価を下すことができないものである。ある都市が何もかも焼けたとき1万の救いの人手が動き出す。そして一軒とかもう一軒とか家が焼けたのとは別のことが進行する。ここにたしかにまた

「古いワインは甘口」という諺をその友は見出すだろう。—— だがしかししぼりたてのブドウ汁がそこにありそれは新しい革袋を必要としている。—— しぼりたての汁は新しい熱情だが、全生活の永遠の泉から生じたわが国民と主の教会に対する、栄光の主御自身に対する燃え立つ愛の熱情である！ 教会におけるこの活動だけでなく各自が用心すべきことは、教会自体がその独自性において傷つくということである。それが教義のもたらす困惑によってであれ、健全な信心を揺さぶる混乱によってであれ。この点でももちろん、移動説教には、すでにいまは危険はないが、間違っただ道が存在する。その道は拒否されねばならず、はじめからわれわれの道でないとして示されねばならぬ。われわれは避けねばならぬことを一言で示すことができると思う。—— われわれがそれを <sup>111)</sup>anxious seat をもつてのショック法、不安法と呼ぶときには。われわれの教会はインネレ・ミッシオンのこのような仕方とは何ごととも共通にはしていない。この厳格さにおいて、最も極端な諸流派、すなわち（北アメリカ）メソディズム教会、ローマ・カトリック教会のそれとは一致するのは非常に注目すべきことである。前者による <sup>112)</sup>protracted meetings（長期集会）およびそれと関連して、明るみにでている実施方法は、先年、バイエルンでリグオリ会員によって催された、しばしば1週間続いた伝道説教と原理において全く一致している。心情に反して暴力的なこのやり方でこの目立った一致の根拠は、もちろん内的に甚だ異なって動機づけられた律法性、非常に遠く離れていてきわめて厳しく敵対している両教会の律法性のなかに求めるべきである。われわれの教会の原理は、それぞれの誤って設定された律法性の否定である。この原理は、信仰による義認が、その宣教伝道の核心・基礎である限り、維持されたままである。その基礎の上に愛、そして孤独なブルーダーたちに対する愛の活動が励まされるのである。それによって教会の本質およびその中で働く健全な敬虔さが守られている。だがこの基礎の上に救済的愛が—— それが説教することでか行為として活動することでか、いずれの形でも高揚し、その道が見出され、またわれわれが語っている目的にまで具体化することができるにちがいない。—— すなわちそれを求めることなく、聞くことのない人に神言をもたらすということ。この意味でわれわれは旅行説教師あるいはまた街頭説教師について語っている。<sup>\*\*</sup>—— この仕方での実効を認めようとししないものは、たんに権利を否定するのみならず、むしろ、それが確かに達成され得る他の道を示すべき義務を否定するのである。だがわが国民が入っている政治

学校が——そこでは公衆、国民の業、国民における、国民のための、といった概念がきわめて完全になるのであるが——改造され、同時に、もちろん外形的だけとしても教会的実効に対する新路線を開くことを助けるだろうと推測される。それはわれわれをやがてまた例えばフランスやイギリスで教会の最も慎重冷静な友にあっても殆ど不快さを感じないどころか、逆にすでに長らく所有しきわめて熱心に促進しているような教会的な活動形式になれさせるであろう。それは、われわれが紹介の中でたしかに様々な矛盾を身につけねばならないものである。

\* H<sup>1</sup>へのヴィヘルンの追記：また東部フランスにおいて<sup>113)</sup>

\*\* H<sup>1</sup>へのヴィヘルンの追記：『ノェルトリンゲン日曜新聞』〔Das Nördlinger Sonntagsblatt, No.41 — 49年10月14日〕はその一連の号にわが覚書の全内容を全てひっくるめて本質的に一部は逐語的に抜粋し、街頭説教師に関する個所を賛同的に掲載し、次のように言う（pg.328）：「ただ一事を思え：サタンの使徒はあらゆる機会に、あらゆる場所で民衆に語る；彼らの傍らに、彼らに反対して市場・街頭で真理の告知者が登場しないだろうか？ 使徒もまた旅行・街頭説教師でなかったか？」同紙はその後、次のような注を付け加えている。「そのような旅行・街頭説教師はどこでも必要とされず、とりわけ小さい町でそうである（時としてそうかもしれぬ？）。だから彼らは独力で働き、どなり立てるべきでないことは確かである。教会は彼らが何を説教しているのか知らねばならず、彼らが教会の教義以外のことは何も説教していないことを確かめておかねばならぬ。彼らは所轄の教会当局および個々の地域聖職者の了解を得ないで行動してはならぬ。ただいずこか聖職者たちが反キリスト的であるとき、彼らの許可なしに行動し、彼らの禁止にもかかわらず、彼らに反対して説教することができる（ママ！）これに対し、非常に大きな都市では、またすでに述べたように、移動労働者等々の大衆のところではかような旅行・街頭説教師はほとんどなしではすまずことができるだろう。そして思慮ある教会管理当局及び理解ある聖職者は彼らにこういような状況のもとでは彼らが正しい人々でさえあれば何も邪魔だとはしないだろう」——ノェルトリンゲン新聞、編集者ライデル牧師〔Pfarrer Leydel〕はこう誌している。——これに対し同紙の付録はあるルーテル派インネレ・ミッシオ



ン協会の暫定定款において「よその職務へ入りこまぬ」ことを強調している。ライデル牧師はこのテーマを引き受け<sup>114)</sup>ないだろうか？

ドイツは今日までこのような活動をもっていない。ただ例えば、その他の点ではグスタフ・ヴェルナー<sup>\*</sup>の独特の活動（ロイトリンゲンにおける）はここで挙げることができる。反論とその同じ時代にゆたかに収めた賛成との間で、1848年という年を通してよりよき協調を開拓しようとした。次第に墮落した大衆の間に行くべき旅行説教師に対し絶えずより一層人が発言するというのはよい前ぶれであった。とくにわれわれはそのようなバーデンからの声が来るのを聞いた。そしてとくにまたバイエルン<sup>\*\*</sup>から来るのを聞いた。<sup>115)</sup>そこではファルビ博士がその最新の紙表紙本でそれを必要としている。同様なことをロマンクもまた多くの優秀さを含んだ彼の小さな共産主義に関する書物において求めているように見える。その際彼は貧しい貧民救済説教師の必要性について語っている。<sup>\*\*\*</sup>

\*H<sup>1</sup>へのヴィヘルンの追記：注意せよ。ヴェルナーは1851年、教会への彼の立場に関し公開〔説明〕（別個に出版したコメントと共にシュトゥットガルトにおいて）を公表し、それによって長らく守っていた沈黙を破った。これに関し Christenbote No.6 (1851年2月9日)での十分な概要を見よ。ヴェルナーの説明は、彼が現存教会における教義の内容に合致しないことを示している。彼はその教義内容に反対の立場を隠してもっていて、これ以上彼にかかわりを生じないことを求めていた。彼はルーテル（福音主義）教会の信仰告白への賛成の説明を拒んだ。ブルクは Christenbote（上記引用箇所において）で非常に痛烈に彼に反対を表明し、全く間違っていないわけではない。かくて本文p.75〔＝上述参照〕で述べた言葉はいまや非常に制限されるべきである。かの書物からの抜粋は Christenbote No.7を看よ。彼は「パウロのプロテスタント教会」を「愛しているヨハネの人間教会」に導き入れようとしている!!<sup>116)</sup>

\*\*H<sup>1</sup>へのヴィヘルンの追記：旅行説教師。バイエルンで49年9月30日、上級教会役員会はミュンヘンに第3副牧師の任用を認めた。同人は旅行説教師として、とくに、上バイエルンのミュンヘン市外で分散して居住するプロテスタントの司

牧のために使われるべきものである。160グルデンの旅行補償と610グルデンの給与——グスタフ・アドルフ財団のポーゼン協会本部は1848／49年 Alt-Kloster で旅行教師の給与に100ターレルを認めた。

\*\*\*H<sup>1</sup>へのヴィヘルンの追記：エルバーフェルトの福音主義ブリューダーフェライン（その長はゼミナール・ディレクター Bouterweck）——とヴェルテンベルクでサロン（パウルス兄弟とホフマン）から出た熱心な試み（と推定される）は行き過ぎである。ここではあきらかな職務迂回である（1850年夏に発生）。個々についてなお詳細に調査されねばならぬ。<sup>117)</sup>

イギリス（および北アメリカ）に旅行説教師がある。その業務はさまざまに訪問行商人のそれと結びついている。訪問行商人が、説教のために規則によって必要とされる教義についての教會的準備を受けていないときにすぐに、これはわれわれにとって一般的には全く正しいとは思われない。だが他方また、両者の業務はまたさまざまにお互いについて分けられている。後者に、フランスにおける場合であるが、そこではこの旅行する教説師使は訪問行商人と住職聖職者の間の一種の中間段階として Evangelist（巡回布教者）の名のもとで任命され、その活動は、通常まず訪問行商人の準備措置に続いている。<sup>118)</sup> イギリスのホーム・ミッション（1819年以来）は150人を維持している。彼らは（かつてのヴィンセンツ・フォン・パウロ伝道会の司祭と同じように）主として農村におくられ、荒廃したゲマインデにおいて説教を通してキリスト者的生活の刺激のために働いた。その上にまた他の団体、例えば司牧救援協会、<sup>119)</sup> が同じ様な意味で活動している。後者は、例えば鉄道工夫やその他の墮落した教区のもとにも説教師を遣っている。あれこれの施設の協力を通して、イギリスではきわめてへんぴな個所の住民——そうでなければ説教を聞くことはなかったであろう——にもいのちの言葉が運ばれることができる。<sup>120)</sup>

第2。これまで述べてきたインネレ・ミッションの作用は教会の中の窮境を癒すためのいのちと愛の救いの思潮に関するよく整えられた組織として働くはずである。そのひとつは、ゲマインデの自らの内部から、すなわち家庭礼拝あるいはバイブルクラスの新しく掘られたいのちの泉から、その囲りのすべてのものと共に、より多く生まれでる。他のものはゲマインデに渡された健全なキリスト教文献の流布から生じる。<sup>121)</sup>

さらにいまひとつは、訪問行商、旅行・街頭説教のように、ゲマインデのなかでの固定したまたは自由な職務には達成され得なくなった仕事の害悪を処理しようとするものである。これらすべて様々に厳しく対立交錯した思潮は、窮局的にその救済的作用をひとつの目的に集中し、ゲマインデはよく整えられた神のいのちの園となるはずである。この内的な伝道作用が長く続けば続くほど、その窮境の深刻さ、つまり小教区および司牧の働き手、また一般的にそれなくしてはゲマインデの教会経済が可能でない個別のゲマインデに対する教會的諸施設が十分でないということが感じられるであろう。インネレ・ミッシオンは彼らが建設のために、この荒廃した場所にも手をさしのべようとしなない時には、その活動に要石をはめこむことを拒否することになる。革命期の開始以来、牧師と教会が不足している場合、十分な数の牧師を任命し、教会を建設するという教会統治は以前よりそれだけ少なくなっているから、彼らはそれだけ一層強く召し出されることになる。この章の初めに<sup>122)</sup>述べているように、祖国の全教会を通じて分散的にわかる状況はインネレ・ミッシオンをして、代理牧師の任命と教会堂の建設を可能にしたり、容易にするための催しに心をひかせるにちがいない。その際、第一の観点とみなされるのは、代理牧師がへんぴな地域自体にその住居をもてたらということである。多くの場合、ゲマインデ自体がよろこんでそのために寄付することになる。事態がそのことへの賛意を示している。それは重要だが単純である。それはインネレ・ミッシオンにきわめて長く属し、教会統治が当該職場に持続的な援助もたらし、その援助は、例えば、副牧師によって次第にあり余るほどになり、それによってこのインネレ・ミッシオンの活動は次第に解消されてしまい、その原則にしたがって見失なわれていない。例えばプロテスタント信者がローマ・カトリック信者の間に分散されて住んでいる教会のその聖務に、インネレ・ミッシオンの中止後も教会統治本部は巡回説教師の任命によってのみ助けることが出来るであろう。<sup>\*\*</sup>これはとくに、例えば上バイエルンにおける場合がそうであるが、数百のプロテスタントたちが教会との集まりから引き離されて家族的にまたばらばらに住んでいる。教会当局、すなわち教会参事会と上級役員会はこれらの地区に対し旅行説教師の任用のための手段を得るために今日までむだ骨を折った。それでバイエルンのインネレ・ミッシオンに、そこから引き継いでいる課題が指示されている。

＊H<sup>1</sup>へのヴィヘルンの追記：代理牧師〔Hilfsprediger〕。任用への候補者を福音主義教会は十分にもっている（本稿 候補者に関する統計参照）。次掲の関係を、例えば、プロイセンにおいて付加すべきである。プロイセンにおける福音主義教会は、1845年、9,428,911の新教臣民に牧師5,839人を有し、これに加えて教会に対ししっかりとつながっている審査中の候補者2,398、カトリック教会は旧教臣民5,820,123に司祭3,559、これに助任司祭2,018、したがって（わたしの計算によれば）

|           |         |                 |          |
|-----------|---------|-----------------|----------|
| カトリック教会   | 司祭      | 3,559／5,820,123 | =1／1,629 |
|           | 助祭      | <u>2,018</u>    |          |
|           | 聖職者     | 5,577           | 1／1,061  |
| プロテスタント教会 | 牧師      | 5,839／9,428,911 | =1／1,614 |
|           | 未任用の候補者 | <u>2,398</u>    |          |
|           |         | 8,237           |          |

これらの候補者が共に任用されれば、プロテスタント教会は1:1,141となる（この報告に関し——計算されてないが——より詳細はフリーゲンデ・ブレターへのわたしの記入をみよ。「ベルリン一般教会紙」1846年10月21日、pg.836によるもので、そこにはなお若干詳述）全く利用されていない働き手への浪費ともいほどの過剰さがみとめられる。例えばスコットランド自由教会では少数者で援助をしていて、不足であったのだが（フリーゲンデ・ブレター、1849, p.153をみよ<sup>123)</sup>）。

＊＊H<sup>1</sup>へのヴィヘルンの追記：そのようになってきている。とくにライン州および東プロイセンにおいて福音のこのような大被害がディアスポラのなかでさらけ出された後でプロイセン最高宗務会議は、1852年6月初め全役員会を通して三位一体後第一主日に教会献金によって慈善的寄与をするように求めた。それによって(!)ローマ・カトリック教会のもとで福音主義教会での旅行説教師への資金を得るためである。それは「福音主義的伝道、つまり旅行説教師の住職制度をあの危機の防止のために作る」はずである。——（「新プロイセン新聞」52年6月11

日、No.134での、ブランデンブルク役員会の公布を看よ。）——ディアスポラの中での福音主義子弟の苦難についての他の例は、Höxerのインネレ・ミッシオン福音教会による同地の救護所のための声明の中でみよ（メクレブルクにおいて<sup>124)</sup>Zeitblatt für die Evangelisch-Lutherische Kirche 1852, Nr.22, p.187）。

イギリスにおいては、すでに少し前に述べた牧会補助協会（1836年以来）がこの問題を解決することを始めた。同協会は牧師の要望に応じて補助聖職者を遣り、同時に教会堂を建立した。<sup>\*</sup>その効果は遠くまで及ぶものであった。——数年前ベルリンにおいて、とくにフォン・フォス伯<sup>125)</sup>の協力のもとに、同様な教会が建立され、その熱心な試みのために多数の参加が求められたならば、当然のことだがイギリスのそれに劣らず多大の成果をあげるにちがいなかった。同協会はかなりの数の補助聖職者を有し、彼らはプロイセン・ランデスキルへの種々の地方に派遣されひとつひとつの場所ではほとんど旅行説教師となった。このベルリン協会があまり支援もされず利用もされないことはわれわれの状況の危険な徴候に数えられるにちがいない。その上、協会は補助聖職者の任用だけで満足し、教会建設とかかわりあうことがなかった。グスタフ・アドルフ協会<sup>126)</sup>は、周知のように、聖職者の任用によっても、教会建設によっても満足すべき働きをしたが、その規則によれば、つねに、ローマ・カトリック教会の住民の周辺にあるゲマインデの間においてのみであった。

**\*教会的施設の拡大についてなお、イギリスの他の大協会についてここで想起する。それにより、ロンドンの前市、Bethnel-Green で10年間に、各7,000Pf. St. の価で50教会が建設され、それぞれに同時に牧師職が創設された。<sup>127)</sup>**

### 校訂者マインホルトによる補注

- 103) ピンカートン博士〔Dr. Robert Pinkerton〕. スコットランドの聖職者でイギリス・外国聖書協会の書記であった。— Lisco, a.a.O., S.20 参照。
- 104) 鉄道工夫の間での、また港湾都市でのキリスト教書籍の訪問行商については『著作全集』Bd.IV, 2, Erl. zu Nr.23 Die Brüder des Rauhen Hauses von 1833-35, Anm. 12 u.13, S.422f. を参照。また Fl. Bl. 1850, S.169ff., 185ff. 参照。— 1848年度プロイセン聖書協会本部第34次年報(ベルリン1849)では S. 11ff.に“Denkschrift über die Bibelbotschaft in dem 15.(Strehleiner) Kreis der Buchwalder Bibelgesellschaft”が印刷されている。筆者はこの地区の責任者であるたるシュレジエンのシェーンブルンのマイドルン牧師〔Pastor Fr. R. Maydorn〕。ブーフヴァルト聖書協会は1815年に設立された。シュッツェ〔O. Schütze, Die innere Mission in Schlesien, Hamburg 1883, S.22ff.〕参照。— 上記注87で述べた『郷土伝道と福音協会』ではS.30ff.で住民の間にインネレ・ミッションの使者を遣うことを求めている。S.33には、7条項でこの奉仕についての教示が出されている。— 訪問行商はプロイセン聖書協会本部第34次年報 S.10において強力に薦められている。— 『北アメリカ教会報告』〔Kirchliche Mitteilungen aus und über Nordamerika, hrsg. von Wilhelm Löhe und Joh. Friedrich Wucherer, Nördlingen 1843ff., とくに Nr.11 Sp.83ff.〕からのほとんど原文のままのヴィヘルンの再現。ここに「アメリカ訪問行商」という項目があり、そこからドイツ人住民の間での訪問行商の実情に関する後続の統計報告を借りている。— メクレンブルク・シュヴェリン聖書協会の布告は1852年5月29日付『メクレンブルク福音主義ルーテル教会時報』〔Zeitblatt für die evangelisch-lutherische Kirche Mecklenburgs, hrsg. von H. Karsten, O.C. Krabbe, F. Schröder, Nr.22, S.186f.〕に復刻されている。
- 105) 『ザクセン聖書協会本部第31次年報』、ドレスデン 1845 はS.4に訪問行商人 Löffler はオーバーラウジッツや隣接するマイssen地区だけでなく、広い範囲において聖書の訪問行商を営むはずであったと述べている。
- 106) 1814年10月19日、イギリス内外聖書協会のイギリス人説教者ペイターソン

〔John Paterson〕の指示に基づいてまたハンブルクの書籍業者ペルテス〔Friedrich Perthes〕の特別な助力でハンブルク・アルトナ聖書協会が設立された。このことについてモェラー〔Kurt Detlef Möller〕(上記注72を見よ) a.a.O., S. 21ff. およびレーマン『ヨハン・ヴィルヘルム・ラウテンベルク、19世紀ハンブルク教会史・覚醒運動史論』〔Hans Lehmann, Johann Wilhelm Rautenberg. Ein Beitrag zur Hamburgischen Kirchengeschichte und zur Geschichte der Erweckungsbewegung des 19. Jahrhunderts, Beiträge und Forschungen zur Kirchengeschichte Hamburgs, Bd. 3(1936), S.8f.〕参照。— また『著作全集』Bd. IV, 2 Erl. zu Nr.2 Anm.6, S.352を参照 — ラールゼン『覚醒と合理主義の間』〔Ingrid Lahrsen, Zwischen Erweckung und Rationalismus. Hudtwalker und sein Kreis, Arbeiten zur Kirchengeschichte Hamburgs, Bd.3(1959), S.50ff.〕—1847/1848年冬における聖書訪問行商に関する報告がハンブルク・アルトナ聖書協会第34次年報, ハンブルク 1849, S.30-42にある。Fl. Bl. 1850, S.169ff., 185ff.を参照。

- 107) 『1846年・1847年度シュレジエン地方聖書協会第26次年報』(Breslau 1848)はS.5で、この方法で「救済に熱心な人と救済が必要な人とを生き生きと結びつける」ために聖書を運ぶ人を地方に遣ることを協会の課題として説明している。ブレスラウ聖書協会は1814年に設立された。シュッツェ〔O. Schütze〕, a.a.O., S.28ff. (注104参照)
- 108) ニューヨーク・トラクト協会に関して、『バーゼル・キリスト教国民使信』, 1848, Sp.171; 1849, Sp.36f.u.213f.により Fl.Bl.1848, S.363ff. (“Das nene Tractat-haus in Newyork”); 1949, S.26ff. (“Gesellschaften der inneren Mission in Newyork”)に報告している。
- 109) 以下〔次頁上段まで〕(次の段落まで)については Fl.Bl.1846, S.67 および 1847, Sp.46 のほとんど逐語的な小記事を参照。
- 110) H<sup>1</sup>へのこれらの追記についてヴィヘルンはFl.Bl.1850, S.183(ヴィルヘルミ〔Wilhelmi〕), S.223(ブランド〔Brandt〕), S.183, S.373f., 1852, S.82f. (ブレンネッケ〔Brennecke〕)からの記事に手を加えた。さらに『1849-1852年ドイツ福音教会のインネレ・ミッシオン中央委員会の実効に関する第1回報告』、

ハンブルク 1853, S.35ff., とくにS.38f.（訪問行商および旅行説教ならびに名を挙げた人々に関し）参照。—— ヴィヘルン自身が参加した1850年6月4,5日のドベランでの会議について、Gerhardt, Wichern II, S.226f.参照。

- 111) これについては Gerhardt, Wichern II, S.147を参照。
- 112) ヴィヘルンはカトリックおよびメソディズム的な伝道布教実践を同一視した。彼が両者を非福音主義的律法性の表現と解したからである。
- 113) リグオリ会員（またレデンプトール会員も）はリグオリ〔Alfons Maria von Liguori, 1696-1787〕とよばれた“Congregatio Sanctissimi Redemptoris”のメンバーによって1732年に創建された。その任務は伝道における、また霊操による特別な魂への配慮である。
- 114) 逐語的にヴィヘルンが挙げた個所（上記注91参照）
- 115) ファブリ『バイエルンのプロテスタント教会の物質的窮境とその可能な除去対策』〔Fridrich Fabri, Die materiellen Notstände der protestantischen Kirche Bayerns und deren mögliche Abhilfe. Eine Denkschrift, Nürnberg 1848, S.16ff.〕
- 116) ヴェルナー〔Gustav Werner, 1809-1887〕, 1840年に開かれたロイトリンゲン児童救護施設の設立者。生ける信仰の積極的な実証という意味でとりわけヴェルテンベルクで活動した。Fl.Bl.1846, S.177ff.参照。ヴィヘルンが集めたヴェルナーに関するメモは“Christenbote”（上記注24参照）, Nr.6, 1851年2月9日, S.67ff.での『教会消息』〔Kirchliche Nachrichten〕の欄にある。さらにL.V.（=Ludwig Völter?）とサインした論文“Gustav Werner und die evangelische Kirche”, ebd. Nr.7, 1851年2月16日, S.75ff.同誌S.75のヴィヘルンが引用したヴェルナーの説明から文章は彼が「パウロのプロテスタント教会」を「愛しているヨハネの人間教会」に導き入れようとしているということ。別個に出席した、ヴェルナー自身によってでなく、彼の意志に反して発表された「公開説明」は手に入れることが出来なかった。ウルスター『グスタフ・ヴェルナーの生涯と活動』〔Paul Wurster, Gustav Werners Leben und Wirken. Nach meist ungedruckten Quellen, Reutlingen 1888, S.162ff.〕およびクナイレ〔G.Kneile〕, 『グスタフ・ヴェルナーとその成果』, カルウ、シュトゥットガルト 1909, S.116ff.



- 117) ロマンク『共産主義の意義』[Johann Peter Romang, Die Bedeutung des Kommunismus. Aus dem Gesichtspunkte des Christentum und der sittlichen Kultur gewürdigt. Ein Vortrag, gehalten in der schweizerischen Predigergesellschaft, Bern und Zürich 1847, S.52ff.] 聖職者の貧困に関して、とくにS.55.— H<sup>1</sup>への追記で述べられたブーテルヴェク [Karl Wilhelm Bouterwek(!), 1809-1868] は1844年以来、エルバーフェルトのギムナジウムの校長であった。ADBIII, S.216参照。— パウルス兄弟、フィリップ [Philipp Paulus Fl.Bl.1850, S.182参照] とイマヌエル [Immanuel P.] )はその母ベアテ [Beate P.] と共にルドヴィヒスブルク傍「サロン」(娯楽場の名前)で授業・教育施設を設立した。この施設にはホフマン [Christoph Hoffmann] がいた。彼はコルンタールの設立者ゴットリープ [Gottlieb Wilhelm H. (彼については『著作全集』 Bd. IV, 2, Erl. zu Nr.23 Der Anfang im alten Rauhen Hause, Anm.12, S.413およびErl. zu 15, Anm.3)] の子で、1853年まで教師。この年、彼はパウルス兄弟から離れた。1861年友人と共に“Tempelgesellschaft”を設立した。ブルッガー『パレスチナへのドイツ人移住』[Hans Brugger, Die deutschen Siedelungen in Palästina. Ihre Vorgeschichte, Gründung und Entwicklung, Bern 1908, S.18ff.] およびグリュンツヴァイク [Grünzweig (『著作全集』 Bd.I, Nr.13, Anm.3), S.86f.] 参照。
- 118) Fl.Bl.1847, Sp.167ff.; 1848, S.20ff.での訪問行商人に関する報告を参照。ここでもヴィヘルンはそれを基礎としているがさらに広い資料を加えている。
- 119) ヴィヘルンは「インナー・ミッション」と「ホーム・ミッション」とを区別した。彼は前者をドイツにおけるインネレ・ミッションの意味で理解した。
- 120) ヴィンセンツ・フォン・パウロ [Vincenz von Paul, 1576-1660]、ラザロ会(1624年道徳的に墮落した者の救護のための「ミッションの司祭」)と慈悲の修道女会修道女(=病人看護のためのヴィンセンシオ宣教会修道女)の創立者、に関し、Fl.Bl.は長い論文(von R.=Riem?), を与えている。1848, S.17ff.; 33ff.; 49ff.; 69ff.
- 121) 「ロンドンの教会司牧救援協会」に関して、ヴィヘルンはFl.Bl.1847, Sp.186f.で報告している。彼のこの論文には\*\*\*I.とサインされた論文「公共道路工事

従事の労働者の窮境について一言」〔Ein Wort über den Notstand der bei den öffentlichen Wegebauten beschäftigten Arbeiter〕が先行している。脚注でヴィヘルンは彼の作業に述べている次のような注記を付加している。「編集者は、寄稿者にこの対象を話題にされたことを感謝するとともに、その救済の必要とそのための提案に関する詳細な報告をする能力を与えられていることが、ほどなくわかる様にと願っている。これらの鉄道工夫たちの霊的な欲求がどこで生じているか、わが読者の若干の方は御承知であるとすれば、この新聞において吐露されることをお願いします。イギリスにおいては、この種のものは別に急がぬことを常としているが、多数の聖職者的、非聖職者的なエージェントが鉄道工夫のために任命されている。上記新聞にはこれに関する小記事がある。この注記はロンドンの教会的牧師司牧協会の活動に関するヴィヘルンの報告と思われる。

122) 上記S.210f. (本訳書(4)p.76ff.)

123) 補助説教師については下注152を参照。——統計的報告は「ベルリン一般教会新聞」Nr.84, 1846年10月21日, Sp.836よりとる。スコットランドに関する所見は、“Noch mehr aus Edinburg” in Fl.Bl.1849, S.150ff.の記事を参照。

124) Zeitblatt für die evangelisch-lutherische Kirche Mecklenburgs, Nr.22, 1852年5月29日, S.182ff. 「ディアスポラにおける福音主義子弟の教育」〔Erziehung evangelischer Kinder in der Diaspora〕の題目で。——ZeitblattについてFl. Bl. 1849, S.32も参照。——この声明は「新プロイセン新聞」Nr.184, 1852年6月11日にヴィヘルンによって逐語的に再現された一節を完全に印刷している。

125) ベルリンの枢密上級法律顧問官フォン・フォス伯〔Graf C. von Voss〕。ベルリン牧会補助協会については、Fl.Bl.1846, S.67ff.をみよ。そこに1843年以来のその活動が報告されている。

126) グスタフ・アドルフ協会〔Gustav-Adolf-Verein〕は二重の起源をもっている。1832年、グロスマン〔Gottlob Grossmann, 1783-1853〕の指示に基づいて、ライプツィヒにグスタフ・アドルフ財団が、また1841年、ダルムシュタットにおいてチンメルマン〔Karl Zimmermann, 1803-1877〕の声明によって「困窮プロテスタント・ゲマインデ支援のための協会」が設立された。両者の合併から1842年には「グスタフ・アドルフ財団福音主義協会」〔Evangelischer Verein der

Gustav-Adolf-Stiftung] となった。両者はディアスポラにおける福音主義ゲマインデと信者を支援するという同一目的を追ったことによる。「グスタフ・アドルフ協会」と略称表示されるこの団体は、1946年以来、“Gustav-Adolf-Werk der Evangelischen Kirche in Deutschland”の名称となっている。——バイエル『グスタフ・アドルフ協会史』〔H.W.Beyer, Die Geschichte der Gustav-Adolf-Vereins in ihren kirchen- und geistesgeschichtlichen Zusammenhängen, 1932〕参照。

- 127) これについては Fl.Bl.1846, S.25ff.の論文“Taten der englischen Nationalkirche für die Armen und kirchlich Veranlassen in England”を参照。ヴィヘルンはゲルラッハ〔O. von Gerlach〕, ウーデン〔H.F. Uhden〕, ジドウ〔A. Sydow〕, シュテューラー〔A. Stüler〕によって報告された論文集『近代イギリスにおける教会施設の増大・拡張を目指した活動に関する聖務報告』, ポツダム, 1845, S.51ff.に基づいている。